

第43回 中区明るい選挙推進作文コンクール

入

賞

作

品

集



中区明るい選挙推進協議会



第43回 中区明るい選挙推進作文コンクール



「中区明るい選挙推進作文コンクール」は、大切な選挙や、選挙につながる「まちづくり」をテーマとした作文を夏休みの課題として区内在住在学の小・中学生から募集し、政治や社会の仕組みに関心を持ってもらうとともに、選挙に関する意識を社会的にも高めることを目的として、毎年開催しています。

今年度は、小学生A部門(1～3年生)に208作品、小学生B部門(4～6年生)に414作品、中学生部門に106作品、合計728作品もの応募が寄せられました。応募作品は、区内小・中学校教諭、中区明るい選挙推進協議会会長、中区選挙管理委員会委員長、中区长により審査され、各部門において金賞1名、銀賞2名、銅賞3名、合計18の優秀作品が選ばれました。

■小学生A部門(1～3年生)

テーマ 「わたしのまちのすきなところ」

■小学生B部門(4～6年生)

テーマ 「より良いまちをつくるために私たちにできること」

■中学生部門

テーマ 「選挙について考える」



入賞作品は中区役所ホームページにも掲載しています

<https://www.city.yokohama.lg.jp/naka/kusei/shikai-senkyo/keihatsu/>

目次

― 小学生A部門（一～三年生） ―

・金賞（中区長賞）	世界とつながる横浜港	大鳥小学校	三年	小川 正	： 1
・銀賞	きたがたしょうがっこう やさしい守り神がいる町	北方小学校 立野小学校	一年 三年	梶佐古 湧弘 齋藤 夏帆	： 2 ： 3
・銅賞	ニコニコおじいさんとおばあさん 本牧山頂公園のすきなところ 楽しいサイクリング	北方小学校 大鳥小学校 立野小学校	一年 三年 三年	恒川 莉吾武 糟谷 紗保 樋口 樹	： 4 ： 5 ： 6

― 小学生B部門（四～六年生） ―

・金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）	ゴミをへらすために出来ること	間門小学校	四年	廣瀬 菜桜子	： 7
・銀賞	事故のないまちにするために ルールとマナー	本町小学校 立野小学校	五年 六年	山田 仁奈 村岡 燦	： 8 ： 9
・銅賞	まずはあいさつから 「仲間」がいればなんでもできる 人と人との良い循環	元街小学校 本牧南小学校 立野小学校	四年 六年 六年	神谷 初 佐藤 大嘉 小林 更紗	： 10 ： 11 ： 12

― 中学生部門 ―

・金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）	若者と外国籍の人々と選挙	横浜吉田中学校	三年	西村 綾香	： 13
・銀賞	成人になる前に 選挙について思うこと	仲尾台中学校 本牧中学校	三年 三年	森 あすか 小島 琴音	： 14 ： 15
・銅賞	未来を創る一票を 選挙で変わる私たちの未来 未来に繋げる	仲尾台中学校 仲尾台中学校 本牧中学校	一年 一年 三年	小野 紗姫 飯塚 文菜 中野 美桜	： 16 ： 17 ： 18

小学生A部門

☆☆☆ 金賞（中区長賞） ☆☆☆

「世界とつながる横浜港」



大鳥小学校 三年 小川 正

ぼくは海や船を見るのが好きだ。大きい客船に乗ってみたいなどあの気持ちはあったり、海を見ていると遠くの国に行けそうでワクワクする。そして何よりぼくが好きなのは、日本全国どこを探してもない特別な港、横浜港だ。

横浜港を知ったきっかけは、社会科見学で行った「なかくつ子クルーズ」だ。そこで、マリニルージュというごうかな客船に乗った。船はただ乗るだけのものと思っていたけど、船の中で食事ができたり、夜景を見たりできることを知っておどろいた。マリニルージュからは横浜のシンボル、ランドマークタワーや山下公園、ベイブリッジなどが見えた。ふだんよく行く場所も海の上から見ると、近くにあるような、遠くにあるような不思議な感覚になった。自分が魚になって見上げているようだった。海からしか見えない灯台もあって、古いけど風景面に描かれそうな小さくてかわいい灯台だった。車両専用船、大きなコンテナ船、ごうかな客船から小さな漁船まで、たくさん船が港を行き来しているのを見て、横浜港の大きさがよくわかった。しかもクルーズを案内してくれた人が、横浜は何もなかった所にまず港ができて、海外と交流しながら発展していった珍しいまちだと教えてくれた。だから今も洋館がいっぱいあったり、外国の人もたくさんくらしているんだと思った。アイスクリームや食パンも外国から日本で初めて横浜に伝わって広まったことも教えてもらった。

横浜港ってすごい。海外と交流して、文化やものを受け入れてきた世界につながるすばらしい港だと思った。ぼくは歴史も好きだから、たしかに良い港を手に入れた武将は強い。こんな港が近くにあるなんてほこらしいなと思った。横浜港は、まるで日本の大手門のようだ。これからも世界中と良さを分かり合える港であってほしいし、多くの人にも横浜港を知ってもらいたいと思った。

〈講評〉

なかくつ子クルーズでの体験をあらゆる視点から綴り、海や船への憧れや横浜港への想いがありありと伝わってくる素敵な作品でした。客船からの景色が比喻を使いながら丁寧に表現されていて、わたしも一気にその情景に引き込まれるようでした。

作品にも綴られているように、横浜港は様々な歴史を経て現在があります。同時に中区も、横浜港と深く結び付きながら歴史を紡いできました。これからも続いていく歴史の中で、横浜港をはじめ、中区がさらに世界中の人から愛され、作者の想いが叶っていくことを心から願っております。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「きたがたしよがつ」

北方小学校 一年 梶佐古 湧弘

ぼくはきたがたしよがつこの百五十一ばんめの一ねんせいです。にゆうがくしきでこうちようせんせいがおしえてくれました。百五十しゆうねんきねんをいにみたいにやりたかったけれど、百五十一ばんめもカッコいいから、ぼくはとつてもわくわくしました。

ランドセルをせおつたら、きんじよのひとがたくさんこえをかけてくれるようになります。ぼくのきんじよにはたくさんさんのせんぱいがいることがわかりました。八十ねんまえは、みなとせきじゆうじのまえのかわでおよいでいたこと。せいとがおおくてみなとちゆうがくにきようしつをかりたこと。百しゆうねんきねんとのきのことや、こうしやをたてかえたときのこともききました。みんなえがおではなしてくれます。みんなきたがたしよがつこのことがだいすきだったんだなとおもいました。

ぼくのつうがくろはみなとのみえるおかこうえんまでのかいだんを百四十六だんのぼつて、さかをくだります。このかいだんをのぼるのはとてもたいへんだけれど、てっぺんまでいくとキラキラしたあおいうみが見えて、すごいげんきがわいてきます。せんぱいもこのかいだんをのぼったそうです。あしがみんなつよくなったそうです。百五十ねんまえのせんぱいもこのうみをみて、げんきをもらったのかなあ。たくさんさんのひとから、きたがたしよがつこのおはなしをきいたら、なんだかなかまにいられてもらえたようなきもちになりました。きたがたしよがつこの一ねんせいになれてとてもうれしいです。だから、ぼくのまちのいちばんすきなところは、きたがたしよがつこのうになりました。

二百しゆうねんるときは、ぼくは五十五さいだね、とままがおしえてくれました。五十五さいになったら、たくさんさんのせんぱいやみんなとおいわいしたいです。

〈講評〉

入学式で、北方小学校が一五一周年だと知った作者は、近所に住む卒業生「せんぱい」から、昔の話をたくさん聞きました。

今と昔との様子のちがいや今と昔とで変わらない姿について、聞いたことや聞いて想像したことを整理して書いてるので、北方小学校がまちのいちばん好きなどころになった理由がよく分かります。

創立二〇〇周年のときの未来の自分や学校のことを想像し、思いを書いているところも素敵です。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「やさしい守り神がいる町」

立野小学校 三年 齋藤 夏帆

「あれ、ここはどこだろう？」もうすぐ小学三年生になるからお姉さんになったつもりでいた私は、道をまちがえてまい子になった。すごく不安で泣きそうだった。どうしようと思つて顔を上げるとしようぼうしよが目に入った。火事の時しか行つてはだめかなと思つたけれど、ゆう気をふりしぼつてドアをのぞいてみた。すると「中に入りな。」と、おじさんがえがおで話しかけてくれた。すごくホッとした。

中に入ると、お兄さんが地図を見せて、ていねいに柏葉公園までの行き方を教えてくれた。けれど私がまだ地図の見方が分からなくて不安な顔をしていたら、「公園まであん内しようか？」と言つてくれた。そのやさしい言葉にホッとして、うれしかった。それを見ていたおじさんが「お姉さんのほうが安心するよね。」と気づかってくれて、お姉さんに声をかけてくれた。なんだかホッとして私はわらつてしまった。そして、お姉さんと楽しくお話をしながらいっしょに柏葉公園へ歩いて行つた。ぶじに公園について、友だちとたくさんあそぶことが出来た。しようぼうしさんのおかげで、その日はすくすくすてきな一日になった。

私の町のすきなところは、やさしいしようぼうしさんがたくさんいる山元しようぼうしよだ。しようぼうしさんは火事の時にかけつけてくれて、火をけして人を助けてくれるお仕事だと思つていたので、あまりかかわりがなかった。私にとつて少し遠いそんざいであつたけれど、今回助けてもらつたことで身近に感じる事が出来た。しようぼうしさんはこまつた人を助けてくれるこの町の守り神だと思つた。私の町は、やさしいしようぼうしさんに守られたあたたかい町だ。私も、こまつている人がいたら、かけつけて、助けたいと思う。そしてこの町を守るいいんになりたい。

〈講評〉

題名にある「やさしい守り神」はだれだろうと思ひながら、この作品を読み進めました。

自分のよく知るいつもの町で迷子になったときに助けてくれた人が消防士さん。消防署のドアを開けるには大きな勇気が必要だつたことでしょう。

そんな気持ちに気付いているように接してくれた消防士さんの様子がくわしく書かれていて、消防士さんの優しさと作者の安心した気持ちがよく伝わってきます。消防士さんとの関わりを通して、「やさしい守り神」への感謝の気持ちとまちに寄せる思いがふくらんでいることがよく表れています。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「ニコニコおじいさんとおばあさん」

北方小学校 一年 恒川 莉吾武

ぼくの、おじいちゃんとおばあちゃんは、みんな、とおいところに、すんでいます。だから、なかなかあえません。コロナがはじまつてから、アメリカのおじいちゃんとおばあちゃんに、あえていません。さみしいです。

でも、ぼくの町には、ほんとうのおじいちゃんとおばあちゃんみたいな人たちがいます。

そとに出ると、

「いってらっしゃい！」

と、手をふってくださいます。かえつてくると、

「おかえりなさい！」

と、ニコニコしてくださいます。

ある雨の日、ぼくは、とてもかわいいおばあさんに、あいしました。ぼくは、おかあさんといっしょに、やまてえきから、でんしゃにのりました。でんしゃは、こんでいました。ひとつしかせきがあいていませんでした。ぼくは、そこにすわりました。おかあさんは、少しはなれたところに立っていました。

つぎの石川町えきで、人がたくさんのできました。その中に、かわいいおばあさんがいました。白いかみのけが少し多くて、かわいいふくをきていました。

そのとき、でんしゃのアナウンスがありました。

「ぎせきは、ゆずりあってごりようください。」

ぼくは、すぐに立ち上がりました。ぼくは、ドキドキしました。小さいこえしか出なかったけど、

「どうぞ。」

と、言いました。おばあさんは、

「ありがとう。」

と、言つてニコニコしました。おかあさんを見ると、ニコニコしていました。でも、おばあさんがなきだしてしまいました。

「こんなに小さい子に、やさしくしてもらつてうれしいのよ。」

と、おばあさんが言つと、まわりの人がみんなニコニコなおになりました。ぼくは、すごくうれしくなりました。

〈講評〉

自分の町にいる、ほんとうのおじいちゃんやおばあちゃんみたいな人たち。電車で出会つたかわいいおばあさん。

「いってらっしゃい。」「どうぞ。」「ありがとう。」などの会話文を書いているので、どのようなやりとりをしているかが丁寧に書かれています。

題名にある「ニコニコ」という、誰もが微笑みを思い浮かべる言葉を繰り返して書いているので、周りの人たちみんなが優しく包まれている様子がよく分かります。相手を思いやることの素晴らしさが、生き生きと伝わってきます。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「本牧山頂公園のすきなところ」

大鳥小学校 三年 糟谷 紗保

わたしは、本牧山頂公園のすきなところがいっぱいあります。どういうところかという
と、まず、てんぼう台から見ると、景色がきれいなことです。てんぼう台をのぼると、天気
のいい日はふじ山が見えます。わたしはふじ山を見ると、とてもいい気分になります。

つぎに、公園がとても広いところです。公園の中は、自然があったり、ゆうぐがあったり、しばふ広場があったりします。わたしは、その時の気分で自然を楽しんだり、遊具で遊んだり、広場で走り回ったりします。いろいろなことができるので、とても楽しいです。

つぎに、わたしの家から、公園まで行きやすいところです。自転車でも、歩いて、とても行きやすく、とても近いです。だから、友達をさそって、いっしょに遊んだりすることが多いです。夏休みになると、イベントをやったり、ラジオ体そをやってることがあります。

それから、本牧山頂公園は、きせつによっていろいろなところがあります。

春は、いろいろな花が咲きます。たとえば、梅やなのはなや桜などです。桜だけでも、いろいろなしゅるいが咲きます。かわづ桜やひ桜、そめいよしのなどです。わたしはひ桜が一番好きです。なぜなら、ピンク色がとてもきれいだからです。

夏になると、いろいろな虫がでてきます。たとえば、かぶと虫やとんぼやバッタなどです。つかまえて、かんさつするのがとてもおもしろいです。

秋は、歩いていると、おち葉がおちてくるからとてもきれいです。それから、バーベキュー場があります。わたしは、毎年友達とバーベキューをやります。けしきを見ながら、お肉を食べるのが好きです。

冬は、おさんぽをしたり、遊具で遊んだりします。さむいけど、体をいっぱい動かせるので、すぐに温かくなります。

このように、本牧山頂公園は、楽しいことがあります。わたしは、これからもここで遊んだり、おさんぽしたり、イベントにさんかしたり、いろいろなことを楽しみたいです。また、ほかの人にも、しょうかいして、わたしのようになりたいもらえたらうれしいです。

〈講評〉

本牧山頂公園の魅力が溢れるほどに書かれ、愛着をもっていることがよく分かります。

「まず」「つぎに」「それから」という言葉を使って、好きなところを順序よく書いています。景色や自然、遊具など、どれをとっても欠かすことのできない大切な場所だと分かっています。季節ごとに移り変わる公園の様子を、自分の経験と結び付けて丁寧に表しています。作者が、子どもも大人も楽しめるこの場所を「宝物」だと感じていることが、ひしひしと伝わってきます。結びに、今も、そして、これから、自分だけではなくほかの人にも好きになってほしいという願いが書かれていて、心に残ります。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「楽しいサイクリング」

立野小学校 三年 樋口 樹

ぼくはサイクリングが大好きです。天気が良い時には家族みんなでサイクリングに行きます。よく行くのは、みなとみらいです。

家から坂道を下りて、山下公園から大さんぼし、ぞうのはなパークを通り赤レンガ、コスモワールドや、りんこうパークなど、けしきがきれいで楽しいところがいっぱいあります。

山下公園は、春にはチューリップ、夏には花火大会を見たりしました。

大さんぼしでは大きな船を見て「いつかあの大きな船でりよ行に行けたらいいねえ」と話しながらさんぼをしたり、学校からもらったきたチラシを見て。プラスポーツの体けんをしたりもしました。

赤レンガでもイベントやてん示を見に行ったり、おか子やいろいろな物を買ってもらったりして、ぼくは買い物が好きなのでとともうれしくなります。

コスモワールドでは、コースターやかんらん車にのったり、けいひんゲームをしたりしてドキドキがいっぱいでした。

帰りはすごい坂道を上るので大変だけど、坂道が多いのもおもしろいし、上りきつた時には気持ち良いです。

ぼくのおじいちゃんおばあちゃんは、いなかに住んでいるので「たつちゃんちはテレビで見るとは違う感じが近くにあっていいね。すごいねえ。」と言っていました。

当たり前だと思っていたけしきだけど、そう言われてから自分たちはすごい所に住んでいるんだなと思いました。

そういうえば、ぼくがテレビでドラマやまちのしょうかい番組を見ている、みなとみらいはよく出てきます。

やっぱりだれが見てもすてきなけしきだということなんだなと思いました。

今までお下がりの自転車だったけど、夏休みに新しい自転車を買ってもらったので早くサイクリングしたくてワクワクしています。

〈講評〉

山下公園や大栈橋。赤レンガ倉庫やコスモワールド。

この作品を読んでいると、まるで自分も横浜の代表的な景色を見ながらサイクリングをしているような気持ちになります。それは、一つ一つの場所で見える景色や経験したことを丁寧に書いてあるからです。この作文を書くことで、家族で当たり前のようにサイクリングしていたまちが、実はとても素敵な場所だということに、改めて気付いたことでしょう。

新しい自転車で家族の新しい思い出を増やして、未来に向かって素敵な時間を走り続けてほしいです。

小学生B部門

☆☆☆ 金賞（中区選挙管理委員会委員長賞）

☆☆☆

「ゴミをへらすために出来ること」

間門小学校 四年 廣瀬 菜桜子

わたしの祖父は、毎朝わたし達の歩く通学路のゴミ拾いをしてくれます。三年前、祖父はけんこうのためにウォーキングを始めました。そして子どもたちの歩く通学路にたくさんさんのゴミが落ちてくる事に気づいたそうです。子どもたちが安全に気もちよく学校に向かえるようにという思いから毎朝のゴミ拾いを始めてくれました。

祖父から話を聞いた後、まちを見てみると多くのゴミが落ちていることに気づきました。たばこの吸い殻やビニール袋、食べた袋のゴミ、犬のふん、ペットボトルや缶、マスクなど本当にたくさんさんのゴミがあります。このゴミのどれにも持ち主がいたはずです。落ちてくるゴミを見ることはいやな気持ちになるし、それを誰かが捨てたんだろうなあと思うと悲しくなります。きつと多くの人は、自分の家の中や家の周りでは簡単にゴミを捨てたりしないと思います。家の中が汚れてしまうし、家の中にはゴミ箱に捨てるといふ決まりがあると思うからです。では、なぜ外では簡単にゴミを捨ててしまうのでしょうか。わたしがもしゴミをまちに捨ててしまったりしたら、ゴミが一つもないような場所より一つでも落ちてくる場所の方が捨てやすいと思います。誰かが捨てているから自分も捨てても大丈夫かも：と思いやすいのではないのでしょうか。一人が捨てて、そのゴミを見た次の誰かが捨てて、またその次の誰かが捨てて：と悪いつながりが生まれます。

調べてみると、まちをきれいにするためのイベントはたくさんあります。わたしの住んでいる地域では「本牧山頂公園クリーンアップラリー」というものが行われています。地域の人や学校の先生、子どもたちとおうちの人もなで本牧山頂公園までの道のりをそうじします。このようなイベントは楽しく参加できたりゴミについて考えることができる良いきっかけになります。しかし、大切なのはそのあとだと思います。イベントだけにたよるのではなく、ひとりひとりの心がけが何よりも大切になると思います。わたしは、出かけるときにはごみぶくろを持ち歩いています。ゴミ箱のない場所ではそのゴミぶくろにゴミをまとめておいて家で捨てています。ゴミをポイ捨てしないことはもちろん、今自分出来ることをして、それを周りの人に少しずつ広げていきたいです。「誰かのまち」ではなく、「自分のまち」であるという思いをひとりひとり持つことが大切です。

〈講評〉

お祖父さんが健康のためにウォーキングを始め、通学路に落ちてくるゴミを拾うようになった。

立派なお祖父さんですね。そこから、捨てられていくゴミに対する作者の観察や思索がごく自然に展開され、さらに地域運動が紹介されます。

課題に対するひとりひとりの心がけの大切さが強調され、そして自分にできる実践に結びつけました。

お祖父さんから始まった健全な心の連鎖が勇気の行動に展開される心地良い作品です。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「事故のないまちにするために」

本町小学校 五年 山田 仁奈

最近、心が痛む出来事があった。その出来事というのは、歳が近く、同じ横浜に住む女の子が交通事故にあり、亡くなってしまったということだ。もし、自分の身の回りでこんなことが起きたら、どんなにつらく、悲しいだろう。

みんなが事故にあわない、平和で安全なまちにできたらいいなと思い、横浜市でどのような原因による事故が多いのか調べてみた。すると、多くは車が原因で、ドライバーの油断やまわりを見ながら運転する脇見運転による事故だということが分かった。しかし、車が原因の事故が多いと言っても、私は歩行者や自転車にもできることがあるのではないかと、という考えがある。なぜなら、歩行者などが交通ルールを守ろうという気持ちや、事故にあわないように気をつけたい、という気持ちがあれば、歩行者も歩行者もゆずり合いの気持ちを持って、事故を少なくできると思うからだ。

「交通ルールを守る」ことに関して歩行者や自転車にできると思うことは大きく3つあると考える。

一つ目は、ながら歩きをしないことだ。最近、信号がてんめつしていても、スマートフォンを見ながら、あるいはイヤホンをつけながらゆっくりと信号をわたっている人をみかけることが多い。事故原因の多くは車の油断や脇見運転だということを考えると、歩行者側もながら歩きをせず自衛する気持ちを持つことが、結果事故をへらすことにつながるのではないかと。二つ目は、横断場所を守ることだ。以前、習い事に行くために車に乗っているとき、横断歩道のない道を急にわたりはじめた人がいた。左右を見ないでわたるので、運転していた母が急ブレーキをかけて止まったが、助手席にいた私もとても怖い思いをした。これも、歩行者自身で防ぐことができる。三つ目は歩行者の服装だ。夜に車に乗ると、黒っぽい服がとても見えにくいのを実感する。逆に、反射材をつけているだけで、光つてとても目立つことがよく分かった。なので、私はバッグに早速反射材のキーホルダーをつけた。

他にもできそうなことを見つけた。それはヘルメットについてだ。今年度から自転車走行中のヘルメット着用が努力義務化された。初めてそれを聞いたとき、私は正直めんどうだと思った。でも、はじめに書いた自転車事故のことを考えると、自分を守るためにもかぶりたいと思う。同じようにみんなもかぶれば、自転車側も、車側も安心して運転でき、悲しい思いをする人が少しでも少なくなる社会になるのではないだろうか。

私は歩行者・自転車側として、まずは小さな一歩でもこれらのことを実践していきたい。そして少しでも、私の住むまちが安全でよりよいまちになるといいなと思う。

〈講評〉

交通事故を自分ごととして捉え、自分の住むまちを安全でより良いまちにするための方法が具体的に書かれています。特に、歩行者や自転車に乗っている人が守るべき交通ルールに着目し、小学生である自分たちが命を守るために出来ることを述べているところが評価できます。今年度から努力義務化された「ヘルメットの着用」についてもよく調べられていて、車の運転者だけではなく、歩行者も責任を自覚してお互いに安全で快適な交通環境づくりに努めていかなければいけないと感じさせてくれます。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「ルールとマナー」

立野小学校 六年 村岡 燦



僕の住んでいるマンションに最近、こんな貼り紙があった。「夜間に、ベランダで電話をしている方がいますが、お控えください。」というものである。

「夜にベランダに出てはいけない」というルールも「ベランダで電話をしてはいけない」というルールもない。この問題は解決したようではあるが、おそらく言われた方も「ルールにないじゃないか」とは言わず、注意した方も「やめてください」ではなく「お控えください」という少しやわらかい表現をしている。

僕の予想では言われた方も注意されるまでは声がそんなに響くとは思っていなかったし、言われるまで気がつかなかったと思う。自分にももしかしたらこんなふうにならずに相手に不快な思いをさせている行動があるかもしれない。

街にもマンションにも、学校や図書館にも、人が集まるところには必ずルールがある。

ルールは誰にでもわかるように示されている。同じように人の集まるところにはマナーも必ずある。ただ、マナーははっきりと示されていないことも多い。

例えば「エレベーターは降りる人が先」や「電車では足を広げて座らない」「人混みでは走らない」などははっきりと示されているものではないと思う。

ルールは、その場の決まり事として強い意味を持つので、みんなが守るし、守らなければその場にいることはできないので、乱れにくい。その反面、ルールが多いと守りきれないものが出てきたり、息苦しいと感じる人も多くなると思う。

マナーは、決められたものがはっきりあるわけではないので、その場にいる人がお互いに守るものとして自覚していないとあまり意味がない。なので、守らない人やどうでもいいと思う人が出てくる可能性があるし、お互いの感覚の違いがトラブルになることもある。

ルールもマナーもどちらも大切で、バランスが大事だと僕は思う。何より大切なのは、ひとりひとりが自分のことだけではなく、他の人のことも少しでも思いやることのできる心の余裕を持つことではないだろうか。僕もいつも誰にでもそういう気持ちを持っていられるように、いろいろな経験を重ねながら成長したいと思う。

〈講評〉

誰にでも分かるように標識や掲示等で示されその場の決まりごととして強い意味をもつルールに対して、はっきりと示されていないマナー。「エレベーターでは降りる人が先」「人混みでは走らない」など普段自分が守っているマナーを思い起こして詳しく書くことができている。決められたものがはっきりと分かるわけではないマナーを守るためには、その場にいる人が相手に対して思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考えることが大切です。一息ついて周りを見渡し、心に余裕をもって過ごすことで人に優しくより良いまちへと変わっていくことでしょう。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「まずはあいさつから」

元街小学校 四年 神谷 初

私は、だれでもかんとんにできるあいさつをすることがより良いまちをつくれるのではないかなと考えました。私たちのまちは人が多いのであいさつをすることが多いかもしれません。でもこのごろはあいさつをしない人をよくよく見かけます。たとえば私があいさつをしても、あいさつを返してくれない人もいます。むしをしてどこかへいってしまふ人、気が付いていない人、はずかしくなってしまう人、あいさつをする習慣がない人などがあるといます。あいさつをする人にも、大きな声であいさつをしていない、目線があいていないなど気付けてもらえない理由があるのかもしれない。私も常にあいさつをするように心がけていますが、知らない場所や土地で、知らない人にあいさつをするのはちゅうちょしてしまいます。それは、はずかしい気持ちもあるし、知らない人だと相手のことも分からないので、あいさつをすることが、なぜかこわくなってしまうからです。それでも、あいさつをみんながするようになればお互いの気持ちが悪くなくなったり、嬉しくなるし、あいさつをくり返す事で、知らない人でも、知り合いになったり、仲良くなることができると思います。私は去年引っこしをしたのですが、まわりに住んでいる方へのあいさつはもちろん、通学路の中にあるマンションの管理人さんともあいさつを重ねたことで全く知らなかった方でも、今ではお互いのことを気づかうくらいの仲になれたと思っています。あいさつは人と人をつなぐ言葉だと思っています。神奈川県では、心ふれ合う3つの運動に取り組んでいると調べて知りました。その一つであるあいさつ運動は、豊かな人間関係を育む、明るく安全な地域づくりをすいしんするためにおこなっているとありました。あいさつをする人がふえると、このまちがだれでも心はずむ人になってやさしいまちになったり、知り合いがふえてたくさんお話している人がまちなあふれ、毎日が楽しくなるまちになると思います。あいさつは、自分の心が開いていることを伝え、目の前にいる相手を認める行為と書いてありました。私は、より良いまちをつくるためにいろいろな人と仲良くなつてこのまちが毎日が楽しくなるためにどんな場面でもあいさつを心がけていきたいです。私はまちなあいにあいさつをひろめるためにすすんであいさつをしていきたいと思います。私の思いが周りの人達に伝わり、誰もがあいさつでつながれるまちになるといいなと考えます。

〈講評〉

引越したばかりの新しい土地で不安を感じて過ごしていた筆者が、近所の人たちとのあいさつを通して明るく変化していく様子がよく分かります。あいさつが増える心が弾み、知り合いが増えていきますね。あいさつをすることの大切さに気付かされます。目の前にいる相手に心を開きあいさつをすることで、新しい習い事、新しいクラス、一緒に過ごしている学校の仲間や先生との繋がりが太くなり、毎日が楽しくなるまちになっていくことでしょう。筆者の強い思いが伝わってきます。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「仲間」がいればなんでもできる」

本牧南小学校 六年 佐藤 大嘉

みなさんは、得意なこと、苦手なことはありますか？おそらくこの二つはみんなが持っていると思います。ぼくだったら、ノートをまとめることが得意で、運動をすることが苦手です。苦手なことを自分だけで得意なことにするのは大変です。だからぼくには苦手なことを得意にするのを手伝ってくれる「仲間」がいます。それはぼくのクラスのみならず。中休みに運動が苦手だからと教室にいると外遊びに誘ってくれたり、体育の授業のときにアドバイスをしてくれます。そのおかげで、楽しく運動ができるようになりました。なかには障害をもっている人がいます。たとえば目が見えない人です。その人の「仲間」は音が鳴る信号機や道路にある点字ブロックだと思います。その人やその人の「仲間」をじゃましないためにも、ぼくは、点字ブロックの上にものを置かないなど、ぼくもその人の「仲間」になってサポートしてあげればより豊かに暮らせると思いました。

だからぼくは、このまちなみんながそれぞれの人たちの立場になって考え、「仲間」になって支えあえば、できることが無限大の楽しいまちができると思えました。

ぼくの学校では「シトリンプロジェクト」という活動をしています。シトリンプロジェクトの、「シト」は今まで取り組んできた「シトラスリボンプロジェクト」を表していて、「りん」は「りんごプロジェクト」を表しています。「学校・家庭・地域の輪」を大切にしながら、心や体の特性に関係なく、だれもが本などの情報に親しみ未来をより良いものに創造していくためのプロジェクトです。

「りんごプロジェクト」に関する本は、読み上げ機能がついていたり、点字や触って楽しめる本などがあります。読むのが苦手だったら触って楽しんだり、目が見えなくても読み上げ機能があれば本を楽しめます。

ぼくは四月の下旬、「映画ドラえもん のび太と空の理想郷」をみに行きました。のんびりやで、学校の勉強もスポーツも苦手だけれど、すぐに友達になれたり優しかったりと、良いところもたくさんあるのび太。のび太の四人の友達もダメなところもあるけれど良いところもあります。その五人が支えあえばどんなことが起こっても解決できます。「仲間」と支えあう大切さがよくわかる映画でした。

ぼくが、みんながそれぞれの人の「仲間」になって支えあえるまちにするためにできることは二つあります。一つ目は「シトリンプロジェクト」を広めること。二つ目は、ぼくが困っている人の「仲間」になったり、「仲間」になってもらったり、支えあうことです。こうすることで、持続可能な開発目標「SDGs」の十一番「住み続けられるまちづくりを」の達成につながると思っています。みんなで支えあって、できることが無限大の楽しいまちをつくりたいです。

〈講評〉

学校で取り組んだ「シトリンプロジェクト」や、主人公が仲間と支え合う映画など、様々な場面を通じて「仲間」というキーワードに着目してまちづくりについての考えを深めています。自分のまちに住む人たちが「仲間」になることができたらできることが無限大に増えるという考えはとても素敵ですね。より良いまちを「住み続けられるまち」とSDGsの観点で捉え直しているところも素晴らしいです。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「人と人との良い循環」

立野小学校 六年 小林 更紗

私は私の住んでいるまち、「立野」をみんなが家族のようにお互いのことをよく知っていて、みんなが安心して楽しく生活を送ることができるといいなと思います。なぜなら、私のおばあちゃんやマンションに住んでいて、上の階の人をよく知らないときは音が鳴ったら、何の音かわからないので不安だったけど、上の階の人が挨拶に来てくれて子供がいることを知るとその音で不快になったり不安になることがなくなったり、逆に足音が聞こえると、今日も元気に過ごせているのだと親近感が湧いたといっていたからです。お互い知らないところや不信感があっても知り合いになり事情がわかれば、友好的になり、困っていたら助けあえるとあります。

「立野」に住んでいる人同士が知り合いで家族のような関係を築くことができれば、不信感や孤独感が無くなり、安心して毎日を暮らせる人が増えると思います。家族のようにお互いのことを知るには例えば自分から積極的に挨拶をしたり、近所の人と関わりを持つことができるイベントなどに積極的に参加することが大切だと思います。互いが家族のようによく知っていると、例えば震災などがあつたときにお互いのことを助け合い、気にかけてあげることができたり、励ましあえるとあります。それは自分たちでできる災害対策の一つだと思います。

私の親戚は他県に住んでいて、簡単には会えません。親戚が近くに住んでいてよく会える人は楽しそうではないなと思います。今一人で暮らしている私のおばあちゃんや、電話で話したり、長いお休みの時に会いに行くと、一人で生活するのは淋しそうですし、台風や地震の時も心配に思います。私のおばあちゃんや遠くに住んでいて、すぐに会うことはできないけど、「立野」にも私のおばあちゃんのように一人で暮らしていて、淋しい人はいると思うので、そんな人と挨拶や会話ができればその人の心の中にある近い親戚の子どものような感覚でいられたらいいなと思います。日本中にそのような関係が広がれば、遠くにいる私のおばあちゃんも誰かが気にしてくれたり、話し相手になつてくれたら私も安心できます。

まずは私にできること、挨拶や地域の行事に参加する事から始めていきたいです。

〈講評〉

お祖母さんの話から、自分の身近な生活に目を向け、近隣に住む人たちとの関わりについて考えを広げているところが評価されました。自分のお祖母さんのような立場の人がいればその人の子どものような感覚でいたいという考えには筆者の優しさを感じます。同じまちに住んでいる人同士が家族のような関係を築くことができればどれほど安心でしょう。地域の行事に参加しあいさつを交わす中で知り合いを増やし、小林さんの力で「立野」のまちを安心して楽しく生活できるまちにしていってください。

中学生部門

☆☆☆ 金賞（中区明るい選挙推進協議会会長賞）☆☆☆

「若者と外国籍の人々と選挙」

横浜吉田中学校 三年 西村 綾香

税金や自治体の事業など、政治によって決められることは、私たちの生活に深く結びついています。

昨今若者の投票率が低迷し、投票率が高い高齢者達の住みやすい環境を目指す政治家が増えていきます。

今後ますます高齢化が加速し、生産年齢人口が減少し、税金も少なくなる一方です。

これからも、高齢者向きの政策が進み、私たちは税金を払う事だけを課せられ、生活が苦しくなるのだとしたら大きな問題です。

それを回避するためには、若者自らが政治に興味を持ち、行動する事が大切だと思います。

また、現在私たちは外国人の労働力にも大きく依存し始めています。

しかし、日本に住んでいる外国籍の人達がいくら日本に税金を納め、長く日本に住んで、日本社会に貢献をしたとしても外国籍の人には投票をする権利がありません。

現在外国籍の人々の意見は政策に反映されない状態にあるのです。

特に、私たちの住む横浜市中区には住民の十一パーセント以上の人が外国籍の人々で、今後もその数は増えていくでしょう。

今やコンビニやスーパーマーケットに買い物に行つて、外国出身らしき人々にレジを打ってもらう姿に出会わない日はありません。

私たちの生活は外国籍の人々に支えられているのです。

税金を払っている若者の投票率が低く、日本に貢献をしている外国籍の人になんの参政権も与えられていない日本の現状は、歪んでいると思います。

私は、日本国籍ですが私の母は外国籍です。

母は外国から日本に移住し、日本人男性である私の父との間に私や私の兄弟をもうけて、日本で働きながら私たちを育ててくれました。

母はもう三十年も日本に住んでいます。

しかし、この三十年でどれだけ母のような外国籍の人達にとって日本は住みやすい社会になったでしょうか？

私にはその成果が見えません。

私は十八歳になったら毎回欠かさず投票に行き、若者の意見や外国籍の人々のニーズも政策に反映できるように努力したいと思います。

〈講評〉

中学生部門では、甲乙をつけ難いレベルの高い作品が多くありましたが、本作品は中区の特徴である外国籍の方が多い特徴を題材にした、大変インパクトのある作品となっており、特に独創性が際立っている点が審査員から高い評価を得ました。

日本人と同じように働き税金を納め、社会に貢献してくれている外国籍の方達には参政権が無く、参政権があるにも関わらず選挙への興味や行動を起こさない若者への憤りを自分視点で素直に伝えており、多くの若い人達が読んで、そして考えて貰いたい作品となっています。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「成人になる前に」

仲尾台中学校 三年 森 あすか

現在、日本の国内外では問題が山積しています。少子高齢化、人口減少、経済の低迷、低賃金、原材料の高騰、ロシアによるウクライナ侵攻、食料不足、半導体不足、中国による台湾侵攻懸念や日本領海侵犯、北朝鮮のミサイル発射など、様々な課題に直面しているのです。

これらの問題に対して、私たちは選挙によって代表を選び、議会で話し合いを行うってもらっています。選挙は、民主主義の基本的な要素であり、国や地域の将来を決める重要な行事です。民主主義とは、国民が国の重要な意思決定に参加し、最終的な決定権を持つ制度のことです。国民が政治に参加し、代表者を選ぶ手段である選挙には、成人の権利と責任が問われますが、まだ選挙権のない中学生も選挙について学び、関心を持つことが重要だと思います。

選挙には、準備と参加が必要です。準備とは、候補者や政党の政策を理解し、情報を収集することであり、参加とは、投票権のある人々が投票所に行き、自分の意思を反映させることです。

しかし、現実的には投票率が低いことが課題とされています。令和4年の国政選挙である参議院議員普通選挙の投票率は約五十二パーセントであり、特に若者の投票率が低い傾向にあるそうです。若い世代の意見も政治に反映させていくために、平成二十七年の六月に公職選挙法の改正により、選挙権年齢が「二十歳以上」から「十八歳以上」に引き下げられたにも関わらず、このような現状を知ると、若者が選挙にあまり関心が無いように感じてしまいます。

また、私たちの中には選挙に行かないにも関わらず、国政に対して不満を言ったり、議員に対して文句を言う人がいたりしますが、選挙権は先人たちの自由民権運動の結果得られたものであり、重要な権利であることを忘れてはいけません。

私は、選挙とは国民が政治に参加し、主権者としてその意思を政治に反映させることのできる最も重要な機会だと思います。なので、私たち中学生はまだ選挙で投票できませんが、選挙は民主主義を支える重要な要素ですので、中学生も社会の一員として選挙に関心を持ち、将来の日本を担う国民として積極的に関与することが大切だと思います。

〈講評〉

日本は民主主義国家だからこそ、国民の意思を選挙で選ばれた代表者を通して政治に反映することができます。しかし「投票率の低さ」という課題があるのが現状です。そんな課題に対する意見を、将来の日本を担う一員として、よく考えよくまとめることができます。「まだ選挙権のない中学生も選挙について学び、関心をもつことが重要だ」という主張の通り、「選挙」という権利について関心をもっていることが伝わる作品でした。

☆☆☆ 銀賞 ☆☆☆

「選挙について思うこと」と

本牧中学校 三年 小島 琴音

以前私は、選挙について特に知ることは無かったです。選挙が行われている時は、車に乗って自分の名前を言いながら「よろしくお願いします。よろしくお願いします。」と連呼して、騒がしいなあと思うくらいでした。

そんな無関心な私が選挙のことを知るようになったのは祖父の話聞いてからでした。私の住んでいるマンションの前の道路が夜になると暗いので不用心で怖いと祖父に話をしました。そうすると祖父は「街灯を増やしてもらおうようにお願いしなければいけないな。」と言いました。そのお願いする人は、ある横浜市議会議員の名前を言っていました。

横浜市議会議員って、そんなこと頼んで応えてくれるのと私は尋ねました。横浜市議会議員が何をする人かも解っていませんでした。祖父は私たちが住んでいる横浜市中区の住民が選挙で選んだ人だから、困ったことが有れば、相談して解決してもらおうのだと言いました。その相談を陳情と言うのだとも教えてくれました。聞いてみればその市議会議員は、子供が交通事故にあった交差点に信号を付ける努力をしたり、小学生の通学路のたくさんの放置自転車を片付けて、安全に通学出来るようにしてくれました。又駅にホームドアを設置したり、通学路の安全確保のためにガードレールを設置したりと、地域に住む住民の暮らしが良くなるために頑張ってくれているのだと教えられました。

祖父は「そのように地域の住民が安心、安全に暮らせて、暮らしを豊かにするために働いてくれる人が議員で、議員は横浜市議会議員選挙で選ばれたんだよ。」と教えてくれました。それと選挙では私たちが住む地域をより良くするために働いてくれる人を選ぶのだから、選挙には参加するべきだとも言っていました。

これで選挙を身近なものと感じることが出来ました。そこで私は選挙について私なりに調べてみました。横浜市議会議員は各区ごとに実施されて、各区で選挙で選ばれる人数が決まっています。選挙で選ばれる人は立候補をして、住民に選んでもらうために、自分の主義主張や今後成し遂げること、過去の実績をアピールします。私たちが選挙に参加するということは、まずは自分の投票者をよく考えることだと思います。選んだ候補者に投票するのは、投票者である私たち住民が地域を良くするための考えを表すことだと思います。なので18歳で選挙権を得ることが出来れば必ず選挙に参加して投票することで、自分の考えを地域に反映させたいと思いました。

選挙には他に、県会議員、横浜市長、神奈川県知事、衆議院議員、参議院議員などの選挙があると知りました。将来必ず各選挙に参加して自分の声を届けて行きたいと思えます。

〈講評〉

選挙を身近なものとして感じる事ができている中学生は、どれほどいるのでしょうか。お祖父さんとの会話をきっかけに、無関心だった選挙のことを知るようになってという実体験を、具体的にまとめられています。「地域をより良くするために働いてくれる人を選ぶ」そう考えれば、選挙を身近なものとして感じやすくなるような気がします。「将来必ず各選挙に参加して自分の声を届けていきたい」という想いを忘れず、今後も選挙について考えてほしいと思います。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「未来を創る一票を」

仲尾台中学校 一年 小野 紗姫

「昔、選挙権は裕福な二十五歳以上の男性のみしかなかった」これは私が小学6年生の社会の授業で習ったことです。今では当たり前になっている選挙権ですが、今と昔では選挙権の見え方はどのように違うのでしょうか。

明治二十二年、日本で初めて選挙制度ができました。しかし、「満二十五歳以上、直接国税十五円以上を納める男子」というごく一部、国民の約一パーセントの人にしか選挙権がなかったようです。それから五十六年の間に様々な人の努力があつて、昭和二十年には女性の参政権が認められて、満二十歳以上のすべての国民が選挙権を持つようになりました。その頃の投票率は五十五パーセントでした。そしていま投票率は四十二パーセントと下がっています。年代が変わるにつれて選挙の価値観は変わっているようです。最近では平成二十八年、選挙権を持つことの最低年齢が二十歳から十八歳に引き下げられました。なので投票率が上がるのかと思つていたのですが、上がらずに下がるばかりでした。その中でも、若者が圧倒的に投票率が低かつたのです。なぜ選挙に行かないのかが気になり調べてみると「政治について詳しくない」や「選挙という言葉が遠い存在」という声があることに気づきました。でも、選挙とはそんなに我々の生活からかけ離れたものではないでしょうか。

「選挙」という言葉から、私は小学校での経験を思い出します。私の通っていた小学校では「立野っ子会議」という学校全体での大きな会議が月に一回ほど行われていました。一クラスから二人代表委員が選ばれます。各クラスの代表委員はクラスの意見をまとめ、会議で発表します。私は代表委員になったことがあります。私はそのとき「クラスの代表として頑張ろう」「しっかりとクラスの意見を発表しよう」と思いました。図書委員会が読書週間をするのでどのような企画がいいかという話し合いました。私のクラスでは、「福袋」という企画を推進しました。この企画は、図書委員がランダムに本を赤い袋に入れ、いろいろなジャンルの本に触れるというものです。意見通り企画の一つに福袋が入りました。たくさんクラスのクラスから集まった代表委員が、政治という政治家だと思いません。そして各クラス二人の代表者を決めること、これが選挙に当たると思いました。選挙は自分たちの思いを公の会議に持つていく代表を決めるためのもので、選挙とはそんなに生活からかけ離れた関係ではなく、常に我々の生活の近くに存在するものではないかと思いません。五年後、私は未来を創る一票を投票しに行きたいと思いません。ぜひ、あなたの未来を創るその一票を今までの歴史と共に投じてみませんか。

〈講評〉

小学校での「立野っ子会議」という活動を通して、「選挙とは生活からかけ離れた関係ではなく、常に生活の近くに存在するものではないか」という気づきを得られた体験をわかりやすくまとめられています。若者の投票率は上がるどころか下がるばかりですが、選挙をもっと身近に感じる若者が増えれば、投票率も上がるかもしれない。そう伝えてくれている作品でした。

☆☆☆ 銅賞 ☆☆☆

「選挙で変わる私たちの未来」

仲尾台中学校 一年 飯塚 文菜

二〇一五年六月から公職選挙法が改正され、十八歳以上の人が投票できるようになったが、実際はどれくらいの人が投票に行っているのだろうか。令和五年の中区選挙投票率は、四〇・四％で、横浜市の中では十八区中十六位だった。また、十八、十九歳の投票率は三十四％だった。ここで私が気になったのは二十代の投票率である。二十代の選挙投票率は二十三％であり、十八、十九歳よりも低く、一番投票率が高い六十代や七十代と比べると二十七％も差がある。なぜこんな差が生まれたのだろうか。

私は、二十代の投票率が低い理由は選挙の重要性をあまり理解していないからなのではないかと思ったが、選挙について詳しい知識はないため、選挙について調べてみることにした。まず、選挙とは国民の中から代表を選び、私たちの意見を政治に反映させる仕組みである。そして、選挙権とは、その代表を選ぶことができる権利である。つまり、選挙権は国民が政治に参加できるチャンスということである。ここまで調べた時、私は二十代の投票率が低い理由は、二十代の人たちが、政治に対して身近ではないと感じてしまっているからではないかと思った。特に私は十三歳なので、選挙権はない。しかしもし私が十八歳になったとしても、選挙について深くは考えられないかもしれない。なぜなら私も選挙は自分と少し距離が離れていると感じているからだ。たしかに選挙のときは、自分の住んでいる町に代表候補が看板に貼られている。でも特に深くは考えずに通りすぎている。十八、十九歳の人たちの投票率が高かったのは、二十歳以下にも選挙権が与えられて間もないため、関心を持つ人が多かったのではないだろうか。選挙権が与えられることが当たり前になれば、関心が薄れてしまうかもしれない。そして、もう一つ投票率が低い理由があると考えられている。それは、投票の方法である。両親は選挙の日に近くの小学校に投票に行ったり、選挙の日に行けないときは地区センターに投票に行っている。投票はいつでもどこでもできるわけではない。現代は多くの人がスマホを持っている。新聞や看板ではなく、インターネットで選挙の情報を発信し、インターネット、もしくはどの年代の人も気軽にに行けるような場所での投票ができるようになったら投票率も上がるのではないか。

今二十代の人たちはいずれこの日本の社会を引っ張っていく存在になると私は考えている。だが今の投票率のままだと、この社会、日本の政治は崩れていくかもしれない。そうならないように、二十代や私たち十代は選挙にもっと興味を持ち、私たちの社会をよりよくするために、政治をもっと身近に感じられるように意識を変えて選挙の投票率を上げていくことが大切ではないだろうか。私が十八歳になったとき、少しでも自分と選挙の距離が縮まるよう、これから少しずつ選挙や政治について学んでいきたい。

〈講評〉

若者の投票率が低い原因は投票の方法にもあるのではないか。投票はいつでもどこでもできるわけではないという現状に対して、インターネットでの情報発信や、どの年代の人でも気軽にに行ける場所で投票できるようにするという方法を考えまとめることができました。「今の投票率のままだと、この社会、日本の政治は崩れていくかもしれない。」いずれ日本の社会を引っ張っていく若者たちに、そんな危機感をもって選挙について考えてほしいですね。

☆☆☆銅賞☆☆☆

「未来に繋げる」

本牧中学校 三年 中野 美桜

私が選挙について興味を持ったのは小学生の時です。両親と投票所に行ったり、選挙の宣伝を聞いたりしたことがきっかけになりました。その時は選挙について何も知らず、多数決のような物だと思っていました。だからこそ小学生の私には無かった視点で今の私は選挙について考えることができます。

なぜ私達は投票する必要があるのでしょうか。

課題は何なのでしょうか。

始めに私達が投票する理由についてです。

投票で選ぶのは、人々の代表となって意見を反映させてくれる方なので私達の未来のために、そして次の世代に繋げるために、しっかりと選挙で選ぶ必要があるのです。

では、その選挙での課題とは何なのでしょうか。一番目にとまったのが若い人の投票率の低さです。二〇一六年から選挙権が満二十歳以上から満十八歳以上に引き下げられました。ですが、十代を含めても若い人の投票率は全体的に低くなっています。理由として多かったのは、「投票の結果どのような影響があるのか分からないから。」「自分が投票しなくても影響はないから。」「行くのが面倒だから。」などがありました。どうすればこのような問題が解決するか、資料を見て考えたことが二つあります。

一つ目は選挙について触れる機会を増やすことです。若い人は他の世代と比べて社会との接点が少ないそうです。だから学生のうちに選挙についての知識をつけるだけでなく、模擬投票のような形で体験する機会を作ることができれば投票がしやすくなると思います。

二つ目は選挙の投票所を工夫することです。例えば日常的に使うスーパーマーケットや、ショッピングモールなどにスペースを作ることができれば投票がしやすくなると思います。少し先の未来では、インターネットを使った投票もでてくるかもしれません。これから、色々な工夫で投票する人が少しでも増えてくれたら嬉しいですね。

私は冒頭で投票するのは未来のためだと述べました。でもそれは色々な世代の人の、色々な考えがあるからこそ未来に繋がるので投票に行つてほしいと改めて思います。

一人一人見えている視点、考え方など全く同じものがないからこそ、一つ一つが重く、大切な一票なのです。

選挙について考えるきっかけは意外と世の中に溢れています。ポスターだったり、TVでの広告だったり、期間中なら選挙の立候補者が自ら宣伝をしています。ささいなきっかけかもしれないけれどそのきっかけを選挙との出会いとして大事にしてほしいと思います。私もあと三年で選挙ができる年になります。十八歳になったとき、今感じていることを忘れないように心に刻んでおきたいと思います。

〈講評〉

小学生の頃に興味をもった選挙について、当時では考えることのできなかつた中学生の視点でまとめることができました。若者の投票率の低さという課題を知っていく中で、模擬投票のような体験をする機会をつくることやショッピングモールに投票所のスペースをつくることなど、選挙がより身近なものになるような具体的な方法を考えることができました。選挙について考えるきっかけを自分たちで見つけていきながら、そのきっかけを大切に生活していきたいですね。

審査をふりかえって

小学生A部門では「わたしのまちのすきなところ」というテーマで、皆さんが考える中区のまちの素敵なところを立派な文章で表現することが出来ました。世界と日本をつなげる横浜港の偉大さに感動したり、自分が通っている小学校の歴史にロマンを感じたり、まちを守ってくれる地域の大人に安心感を抱いていることなどを教えてくれました。

小学生B部門では「より良いまちをつくるために私たちにできること」について様々な視点から考えました。まちに落ちているゴミの問題については1人ひとりの意識について問いかけ、まちで起こる悲しい交通事故を無くすためには自動車の運転手だけではなく歩行者もルールを守る意識が必要だということが書かれていました。そして、みんなで自分たちが住むまちをより良くするためには心の余裕をもち、マナーを守って生活していこうとする意識が大切だという、当たり前だけど、とっても大切なことを改めて教えてくれました。

中学生部門では「選挙について考える」をテーマに、現在の選挙における問題点を挙げ、より良い形にするためにはどうすれば良いか考えました。若者の選挙離れ、高齢化による税金の課題、投票率の低下など課題点を挙げればキリが無い現在の状況に、中学生の自分に出来ることは何かと考えます。外国籍の労働に依存し、税金を納めてもらっているにも関わらず参政権が得られていないことに対する疑問や、自分たちの暮らすまちをより良くするための選挙とはどのようなものかと、選挙の在り方についての深い思慮が巡らされていました。

どの作品も、自分たちが生きる「まち」について多角的に考え、そこにあるプラスの面もそうでない面にも真摯に向き合い、自らの考えを一生懸命表現してくれました。これからもまちを愛する気持ちを忘れず、より良い社会を創っていけるよう考え続けていきましょう。



■作品の選考・講評■

横浜市立北方小学校主幹教諭	瀧川 智
横浜市立立野小学校教諭	中里 優子
横浜市立横浜吉田中学校教諭	高見 怜奈
横浜市立横浜吉田中学校教諭	石川 紘靖
横浜市中区明るい選挙推進協議会会長	嘉代 哲也
横浜市中区選挙管理委員会委員長	山中 利弘
横浜市中区長	小林 英二



第43回

中区明るい選挙推進作文コンクール入賞作品集

令和6年1月発行

発行

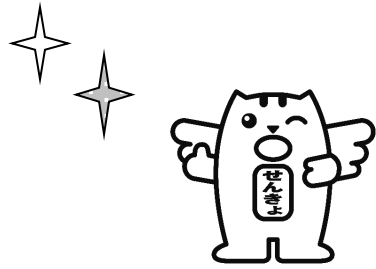
中区明るい選挙推進協議会／中区選挙管理委員会／中区役所

〒231-0021

横浜市中区日本大通35番地

TEL 045-224-8117

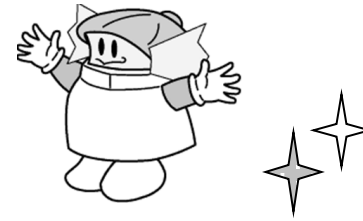
FAX 045-224-8109



あか せんきよ
明るい選挙キャラクター
せんきよ
選挙のめいすいくん



よこはましなかく
横浜市中区のマスコット
スウィンギー



よこはましせんきよ
横浜市選挙のマスコット
イコットJr.